〔論文〕

昭和10年前後の村社の狛犬奉獻と社殿改修・式年遷座祭について —長野県安曇野市真々部区有文書を中心に—

黒崎 八洲次良

キーワード：耕地 式年遷座祭 昭和初期

はじめに

昭和6年9月から8年5月の満州事変と満州国成立と国際連盟脱退、同11年2月の二・二六事件などの国内外での大事件や大問題のなかで、昭和恐慌への適切な対策によりようやく米価と繭価の暴落から立ち直り始めていた。しかし、国内ではさまざまな社会諸問題およびロシア革命に始まる社会主義思想への対応と混乱という状況におかれていた。そのなかで真々部耕地はふたつの大きな事業をおこなっていた。同9年の村社真々部諏訪神社の狛犬奉獻と11年の社殿改修と式年遷宮である。両事業とあわせて10年の国勢調査などによる高家村および真々部耕地の概況を観察した。

この時期の経済状況をみるために、長野県の国税収入をとりあげる（表1）。収入総額、地租および酒造税である。地租は明治18（1885）～大正5（1916）年には総額の34.2～89.8%、酒造税は明治23（1890）～大正5（1916）年には総額の33.0～43.0%を占めている。そして地租および酒造税は土地所有との関わりが深いとみられる。

KUROSAKI, Yasujiro 本学社会学部元教授、信州大学名誉教授

収入総額は大正9（1920）に1,084万円余と1,000万円を超えてから昭和5年まで1,000万円台を維持したが、これを頂点として以後684万円余から820万円余を推移する。大正9年の収入総額を100とすると、昭和7年の62.9から同11年の75.4を推移する。この国税収入の大幅な減収のなかで地租および酒造税の占める割合はどうであったか。昭和7～昭和10年には収入総額の70%を超えていたのである。

表1 長野県の国税総額、地租および酒造税 単位：千円

年度	大正9年	14年	昭和5年	6年	7年	8年	9年	10年	11年
収入総額	10,874	13,365	10,566	6,863	6,840	7,876	8,012	7,488	8,203
地租	1,939	1,934	1,662	1,635	1,438	1,325	1,330	1,330	1,327
酒造税	4,548	5,609	5,157	3,091	3,632	4,297	4,610	4,075	4,217
※大正9年を100とする									
収入総額	100.0	122.9	97.2	83.1	62.9	70.6	73.7	68.7	75.4
収入総額を100とする									
地租	17.8	14.5	15.5	21.0	19.4	17.3	16.6	17.8	16.2
酒造税	41.8	42.0	48.8	45.0	53.1	56.0	57.5	54.6	51.4

（出典）長野県（1989）『長野県史 近代史料編 別巻 統計（一）』p.323による。

南安曇郡は「米どころ」、とくに高家村は郡の米の作付面積の10%前後を占めており、真々部耕地は養蚕を副業とし、農業は米作中心であったという。そこで全県の経済状況については国税収入をとりあげたことになって、高家村の米作の推移をあげた（表2）。

作付面積は昭和5年の456町歩から11年の517町歩、大正9年のそれを100とすれば、94.6から107.4、収穫量は昭和7年の8,240石から大正9年の14,323石、大正9年を100とすれば昭和7年の57.5から大正9年の100、価格は昭和6年の14.4万円から大正9年の46.3万円、大正9年を100とすれば昭和6年31.3から大正9年の100を、それぞれ推移した。とくに価格が低迷した昭和5年から7年は31.3から35.8となった。一反歩あたりの収量は昭和7年の1.72石を最小とし、他はいずれも2石を超えるが、大正9年の2.97石にはおよばなかった。一石あたりの価格は昭和6年の15.25円から大正14年の36.03円を推移するが、昭和5年から8年にはいずれも20円に達することなく、6年には15.25円と大正9年のその半値にも満たない有様であった。

以上は前稿のこの面を補うためのものである。いずれにせよ、昭和5～8年の不

況がきわめて深刻であったことをうかがわせる。

表2 高家村の米の作付面積（町）、収穫量（石）および価格（千円）

年度	大正9年	14年	昭和5年	6年	7年	8年	9年	10年	11年
作付面積	482	482	456	471	478	457	459	476	517
収穫量	14,323	10,015	10,199	9,498	8,240	12,198	9,722	11,526	11,817
価格	463	352	165	144	161	223	257	312	319
大正9年を100とする									
作付面積	100.0	100	94.6	97.8	99.2	94.9	95.4	98.9	107.4
収穫量	100.0	69.9	71.2	66.3	57.5	85.2	67.9	80.5	82.5
価格	100.0	76.0	35.8	31.3	34.9	48.2	55.7	67.4	69.1
1反歩あたり収量									
単位：石	2.97	2.06	2.24	2.01	1.72	2.67	2.11	2.42	2.28
1石あたり価格									
単位：円	32.35	36.03	16.26	15.25	19.81	18.29	26.52	27.08	27.04

（出典）長野県（1985）『長野県史 近代史料編 別巻 統計（二）』掲載の第24表による。

1. 「昭和拾年度 公文書綴 真々部耕地」より

前稿で触れたが「昭和拾年度 公文書綴 真々部耕地」は他の年度のそれらとは異なり、耕地が高家村村長へ提出した概況報告書である。いくつか取り上げることとする。

まず、制度上の近隣組である。昭和3年度には1号組から24号組まで24か組あったが、この年度には1号組から22号組と2組減少した。構成戸総数が253戸とあり、同9年前期の耕地内の協議費賦課戸数251戸と同11年前期賦課戸数242戸の間にある。そしてそれぞれの構成戸数1戸から22戸におよぶ。このうち1号組は上真々部集落全戸の19戸、6号組の22戸は中村集落のある木戸（きど）、10号組の20戸は殿村のある木戸、16号組の21戸も町通りのある木戸の全戸を構成員としているように見える。その他に構成戸が10戸以上からなる9か組があるが、それぞれ成立が明治以前の庚申仲間の歴史をもつようである。さらに構成戸10戸未満の各号組は10年度の「収納原簿」の不備からその成り立ちは今後の考察に委ねることにした。なお、この年度の総代は前年度同様3名であった⁽¹⁾。

青年会がどのように活動していたか。それは同年1月24日付の真々部青年会長

が同耕地総代あてに提出した「申請証」から何うことができる(表3)。村社真々部諏訪神社の例祭には共親社が深く関わっており、青年会が敬老会、呑堰請負、夜警、除雪、軍隊慰問などを行ったようである。これらの事業の財源のなかに、呑堰請負費、夜警補助費、除雪費などの奉仕の伴う収入と縄積立費や会員割などの自主財源などがある。呑堰は真々部耕地の主要生活用水源であり、青年会がその堰さらいなどを請負、主要な道路の冬季除雪、道標の整備などを行い、会員相互の親睦のために春秋遠足および総集會をもった。⁽²⁾

県内西在郷軍人会が高家村分会へ忠魂碑寄付金割当を行っている。高家村の689戸へ1戸につき98銭、総額675円22銭を賦課した。真々耕地は223戸、218円54銭が割当られた。さらに村税特別戸数割1円につき35銭を総額19,562円に賦課した。真々部耕地は同戸数割3,726円、賦課額は130円41銭、寄付額総計348円95銭となった。

表3 申請証

申請証			総支出之部	
	30円	呑堰請負費	15.00	敬老会
	20円	夜警補助費	3.00	消耗品
	15円	敬老会費	4.00	呑堰請負当日茶菓
計	65円也		3.00	除雪馬札
	右申請候也		3.00	除雪茶菓
	依ツテ事業計画及支出総額別紙之通		1.00	道標書ナオシ
	二御座候也		5.00	基本金積立
	昭和十年一月二十四日		15.00	図書購入
	真々部青年会長 中楨清雄 印		5.00	軍隊慰問
	真々部耕地総代殿		12.00	除雪器新調
	内訳書		0.70	提灯修理
	総収入之部		10.00	春秋遠足
	30.00	呑堰請負費	10.00	総集會費
	20.00	夜警補助費	0.40	雑費
	15.00	※□除雪費	計	87.10
	2.50	縄積立費		
	10.00	会員割		
	9.60	除雪器新調補助		

※□の部分は判読不明箇所である。

表4 忠魂碑寄付金割当額（単位：円）

	戸数	同上 賦課額	村税特別 税戸数割	同上 賦課額	合計
真々部	223	218.54	3726	130.41	348.95
飯田	145	142.10	6135	214.725	356.82
小海渡	14	13.72	396	13.86	27.58
中曽根	117	114.66	3431	120.085	234.74
熊倉	190	186.20	5874	205.59	391.79
計	689	675.22	19,562	684.67	1,359.88

表4では真々部は223戸とあり、高家村の5か耕地のなかでもっとも戸数が多いことになる。しかし、村税特別戸数割では飯田や熊倉に次ぐ3,726円で、1戸当たり16円70銭となり、中曽根のそのの29円32銭に及ばない。この事情の一部は前稿を参照していただく。さて、近隣組22か組の総戸数は253戸である。また小海渡は飯田に含まれているのだが、ここでは一耕地としてある。それゆえ、上表での各耕地の戸数はそれぞれの区費などの戸数とは別の基準によるものであろう。同年2月8日付で真々部耕地総代は高家村長へ第3回政府払下げ米を申し込んだ。数量は追加22俵である。

さらに、同月9日には集会所にて農事養蚕実行組合長会議を開く。農事組合と養蚕実行組合との合併による農家組合組織の件で、出席組合長は10名であった。また同日、中萱耕地総代より同耕地の同10年度の4名の耕地総代の氏名が通知された。

集会委員会の記録がある。第1回集会委員会が同年1月25日にもたれ、21名が出席する。兵士への防寒チョッキ寄贈、会計審査3名の選挙、人夫賃決定（6,7,8月中は70銭、他月は60銭）、呑堰さらい堀、青年会補助、道路拡張、耕地歳入歳出予算承認、納税組合設置などが審議可決された。第2回は3月9日にもたれ、献額、自警団設置、道路の境界に植木をすることの制限法、養兔飼料採取、養鶏、樹木伐採などが審議された。

報告事項には倭村水室消防組への寄付額、忠魂碑寄付金、真鳥羽堰水門改修工事、小倉村北沢山林入会山などがあつた。さらに、同年度梓川左岸水利会分賦金、3名の土地寄付者氏名と坪数が報告された。

同年4月26日付で耕地総代より高家村長への申請書が出された。村道から明盛村一日市場および七日市場へ通ずる中萱堰橋梁の至急架替の申請であった。同年4月27日には長野県物産検査所豊科支所高家出張所が新設された。さらに、5月9日に真々部集会所で高家村の種痘接種が行われ、6月16日に同所で検診がなされた。該当者が31名あった。

昭和9年度には部落協議費調がなされ、表5のとおりであった。費用支出額3,023円98銭に対して費用徴収額が2,340円80銭、差額が683円18銭である。つまり、赤字が費用支出額の22.6%におよぶのである。

支出額では水利費と神社費で合計の47.15%を占めるが、その他が722円27銭、合計の23.88%を占めていた。徴収額では賃貸価格割と地積割をあわせると合計の74.85%である。このような歳入（費用徴収額）の欠陥が昭和5年から10年まで見られたのである。なお、10年度の耕地総代は耕地の未納者33戸と耕地外の未納者3戸の耕地費未納金額が2,963円51銭であることを引継いでいた。

表5 昭和9年度部落協議費調（真々部耕地）

費用支出額			費用徴収額		
費目	金額	同比率	費目	金額	同比率
土木費	111.63	3.69	賃貸価格割	1,201.99	51.35
水利費	770.17	25.47	地積割	550.17	23.50
衛生費	34.94	1.16	戸別割	588.64	25.15
警備費	48.00	1.59	合計	2,340.80	100.00
神社費	655.68	21.68	合計を100とする比率は付加したものである。 金額の単位は円である。		
寺院費	295.00	9.76			
勸業費	54.17	1.79			
事務費	202.31	6.69			
会議費	100.87	3.34			
諸税負担	68.94	2.28			
その他	722.27	23.88			
合計	3,023.98	100.00			

2. 狛犬奉獻と「寄藤先生頌徳碑」について

真々部諏訪神社の神楽殿の左右に「狛犬」が奉獻されている。これは昭和9年9月竣工し、10月3日除幕式をおこなった。表6は「狛犬建設寄付者芳名」により作

成した。総収入3,906円余、総支出3,230円の事業である。そして9年度から10年度におよぶ事業であった。

狛犬建設寄付のための委員は松尾姓3名、降籬姓2名、竹内姓5名、手塚姓6名、大谷姓2名、三澤姓2名などに有賀、丸山、藤原、二木、宮瀬、勝野、槇石、古川、矢下などの各1名、計29名（うち3名の氏子総代）と社掌の西川氏である。これらの委員選出は耕地の総意に基づくもので、特定の同姓にかたよるものでなく、この時期にしかるべき各戸の戸主たちのようであった。

寄付金募集は一口10円から1,000円までの68名であるが、うち120円の一口は降籬姓の県外一同である。30円がもっとも多く45名である。地域分布をみると松本市、南安曇郡の7か町村、東筑摩郡の2か町村にかぎられず、東京市、名古屋市、京都市などの大都市から山梨県や遠く北海道におよぶ。そして松本市がもっとも多く22名、ついで東京市の10名、東筑摩郡の洗馬村の7名、南安曇郡の豊科町、倭村、梓村の各4名となる。松本市への転住については前稿でも触れたが、相当の土地所有者の本家格の数戸が含まれているが、洗馬村は中山道と善光寺街道の分岐する旧宿場が所在することにかかわるかもしれない。なお、「寄付金募集必要土産品通信費旅費其他」が299円92銭計上されている（表6・表7・表8）。

表6 狛犬建設のための収入と支出 単位；円

収 入		支 出	
寄付金総額	3,625.00	狛犬代金及び附随諸費用	1,000.48
除幕式費トシ氏子中引	200.00	狛犬台築造費ナド	824.36
共有財産売却	50.00	記念碑建設	474.64
来賓篤志寄付	13.00	天正皇大神宮御前狛犬関係費	21.25
信用組合預金利子	14.76	除幕式関係費	301.18
同上	3.90	会議費	49.38
総収入額	3,906.66	寄付金募集関係	399.92
		頌徳碑建設ノ寄付	258.50
		総支出額	3,230.71
差 引			
高家信用組合定期預金	500.00		
同上ノ当座預金	140.95		
寄付金未納三人分	35.00		
残 金	675.95		

右収支計算ハ昭和拾壹年三月末現在ニヨル
共有財産売却は「高家村ヨリ無償譲渡ノ箇所売却代金総額」である。

表7 耕地外寄付者の金額階層

金額	寄付者数
10	2
30	45
35	1
40	5
50	6
60	1
70	3
100	3
120	1
1,000	1
計	68

(出典) 表7、表8の引用資料は表6とおなじ。

表8 耕地外寄付者の地域別分布

地域	寄付者数
松本市	22
豊科町	4
南穂高村	2
明盛村	2
温村	2
倭村	4
梓村	4
高家村	1
本郷村	3
洗馬村	7
東京市	10
名古屋市	2
京都市	1
山梨県	2
北海道	1
県外	1
計	68

狛犬代金などと狛犬を設置する台の築造などの諸費用が1,824円余で総支出額の56.5%弱を占めた。それに天正皇大神宮御前狛犬関係費用とあるが、これは天照皇大神宮御前の誤りではないかと思われる。境内に神明社が合祀されていたことと関係であろう。それを加えると狛犬設置諸費用が1,846円09銭となる。

竣工すると次に除幕式へとはこぶ。その準備員の役割配分は次のようであった。総務部、受付係、来賓式場係、式場係、餅受取係、および会計係であり、各係に1名の主任をおき、総人員は主任6名と係員23名の計29名となった。

10月3日の除幕式には投げ餅がおこなわれた。それは22か号組から計45俵が提供された。1俵が1か組、各2俵が19か組、同じく各3俵が2か組あった。この面からみても、狛犬建設設置は、耕地の総力をあげての事業であった。

さて、前述のとおり、この年度の協議費支出総額が3,023円98銭、その徴収額が2,040円80銭、赤字額が683円18銭という状態であった。狛犬建設は耕地外の多くの耕地出身者の寄付によるのであるが、その支出総額が3,230円71銭であり、協議費支出総額を200円余も超えていたのであった。

「寄藤先生頌徳碑」は昭和10年7月に村社真々部諏訪神社の前苑に建立された（表9、表10）。

表9 寄藤先生頌徳碑建立の収支

収 入	金額：円
門人及有志寄付基金	206.00
狛犬部 ³⁾ 寄付金	258.50
除幕式/節勝野諸氏/篤志寄付	35.00
収入総額	499.50
支 出	金額：円
基礎工事費	29.05
台石一式	103.00
碑石一式	157.80
除幕式費	122.35
雑費	87.30
支出総額	499.50

表10 金額別寄付者数

金額：円	寄付者数
0.5	1
1	56
1.5	10
2	20
2.5	4
3	22
5	2
10	1
計	116

寄藤先生は安政3年に松本藩士の家で出生し、明治7年11月に筑摩県師範学校を卒業する。同14年5月に真々部学校に校長として赴任し、一村一校の制により飯田耕地に高家学校が設置されると、真々部学校はそのもとにおかれる。ついで先生は同22年4月に高家学校の校長となり、同25年4月に転任する⁽⁴⁾。したがって11か年の勤務となるが、この間、一貫して真々部耕地に居を定められ、その徳を慕う村人が頌徳碑建立を成し遂げたのである。先年に狛犬奉獻がおこなわれ、そこからの寄付金が収入の51.8%弱を占めるが、238戸のなかから116人の有志の寄付と寄藤先生よりとくに強い薫陶を受けたと自認する勝野3氏の35円の篤志寄付などで総額499円50銭となった。支出のなかで台石一式と碑石一式とが合わせて260円80銭となり、ついで除幕式費が122円35銭とあった。門人および有志者代表が12名のそれぞれから計20名あげられた。このなかで竹内姓が6名、手塚姓が3名、松尾姓が2名であったが、他の9姓はそれぞれ1名ずつであった。

寄付金額ではそれぞれが50銭から10円におよぶが、1円が56名、3円が22名、2円が20名などであり、10円は1名であった。この10円の寄付者が勝野氏であり、彼は真々部学校の授業生をへて高家村役場の職員として勤務し、門人代表の一人

であった。

さて、寄付者総数の116名は明治9年後半期の238戸の半数に満たなかった。しかし、「狛犬部ヨリ寄付金」がよせられており、村社境内に頌徳碑が設置されたのであるから、門人および有志者をふくむ耕地の事業の一つとみてよいのではないか。

3. 村社真々部諏訪神社破損改修事業について

この経緯を『昭和十一年第四月 式年遷座祭誌 吉日 諏訪神社』および『昭和十一年四月 式年遷座祭公文書 真々部諏訪神社』により時系列的に観ることにする。

昭和11年3月26日 去る1月耕地委員会において式年遷宮執行に関し氏子総集会を開催し、席上委員を推挙する。人員は氏子総代4名、耕地総代3名のほかに28名とする。第1区（上真々部・梓橋）6名、第2区（中村）7名、第3区（殿村・田中）7名、第4区（町通）7名。

昭和11年4月5日 第1回委員会 御本殿改修工事は松本市山口好文氏に一任し調査設計をすることに決定する。

4月22日 第2回委員会 御本殿修理は設計書に基づき概算予算を編成する。

御本殿637円84銭

外に御内神30円 上棟式費150円 小遷宮式費35円 本遷宮式費55円

共親社100円 雑費150円 概算 計520円

二口ノ 1,157円84銭 内157円84銭材料費見込 300円予算あり。差引700円也以上を寄付により調達すること。

4月27日 第3回委員会 浄財（寄付金）募集につき（耕地）内外一斉に取掛ること。飯田・新田町・下鳥羽・上鳥羽・一日市場・七日市場・中萱・豊科町などへ各委員が出向き、結果を報告すること。5月10日会合し、寄付募集の残りの一切をおこなう。次回会合までに確実な職人と打合せ、明確な人を特命する具体案を作成する。5月24日の耕地委員会に決定事故を報告し、翌日役場へ出頭し、案文を作成し申請する。

枯損木（老松）の処分は神社基本財産へ繰り入れる。寄付金募集は即納または

二分割とし、期日は7月10日頃に第1回、8月25日頃に第2回で全部終了する。

右大臣、左大臣改修は保留とする。

5月7日 耕地委員会招集 上記協議機構および決定事項を「耕地決議録」に記録しておくこととなる。

5月12日に仮遷座祭執行 神渡時刻は自後9時至10時半、出席者は委員24名、共親社、青年会および女子青年団より男子11名と女子5名、委員の欠席者は4名であった。神官は社掌と補助神官4名、役場より助役その他3名であった。

そこで、まず、寄付募集の経過と寄付金額概略合計1,142円50銭也、神社引外に共同便所設置、枯槁木入札の経過、松本城西町末広屋よりの寄付（神楽殿四角に吊るす灯籠）などが報告された。

それより女子青年団の奉仕する夕食（握り飯）をとる。午後9時、社掌を先達として神官4名、村長代理助役、役場吏員1名、氏子総代、耕地総代、式年委員、真々部共親社、青年会、女子青年団などが大前に着席。神扉を開放、社掌大前の北側へ、奉幣使・氏子総代・委員南側へ、耕地総代、委員各側へ一列に並び社掌御内神をきわめて厳かに捧げ御通過遊し仮宮へ遷座をなす。時に午後10時40分、一同北座となり所謂手打ちをなし、御神酒をいただき、最後の手打ちなし、儀式終了。それより社務所へ一同祝賀の意を表し御神酒を乾杯して、午後12時半散会する。

7月12日 第4回委員会 御本殿修理はこの際旧型を復興し徹底的に改修を加えることに決定する。寄付金募集の結果が報告され、理事者が材木製材までの経過を報告する。今後の工事のついての方針を協定する。

委員会中より理事者の相談役を選定し補佐することに決定する。相談役は勝野嘉文治、藤原拓次郎、手塚嘉金治、手塚鶴一、竹内喜長、竹内平三郎、松尾今朝義、古川栄一郎の諸氏。工事は耕地の職工へ受け渡し設計書とおりに遂行することに決定。委員は今まで通り理事者の通知を受け、適任適所に奔走すること。

工事見積書を作成し受渡する際は、一般委員を参集して、その席で開票決定すること。左右両大臣は一對30円以内で塗り直しすること。御本殿御扉は旧様式に改正すること。最後の寄付金募集期日は8月16日までとすること。

7月15日 相談役会 同日 第5回委員会 工事の受渡の件につき談合および打合せをおこなう。

7月16日 相談役会 山口技師臨席の下に左の受渡をおこなう。

大工 三澤嘉清 御本殿改修その他の仕事 金150円の契約
屋根職 三澤美好 御本殿屋根葺替の工事 金100円の契約

7月22日 相談役会 左右大臣御修理を松本市末広屋に請負せる（神社境外共同便所三澤義清氏に請負し、本日完成する。）

同月28日 手斧始祭執行する。午後6時社掌が来て執行する。午後4時相談役会を招集し、氏子総代表、委員代表、職工代表が参列する。職工代表が拜殿に檜の峯木を飾り、社掌の命令により墨打ちをなし、鉋を掛けて手斧打ちをなし、厳かに式を挙げ御清祓式を終了。参列者は委員8名、職工5名、理事者4名などである。

8月7日 耕地委員会 上棟式の際の屋根餅は耕地委員の18か組を中心として理事者より五人組居組として俵2俵ずつ支出献ずること。遷宮式費として耕地予算書にある300円のうち、前期割として100円を入れ、残額200円は御祭り後臨時費として別に取立すること。なお神社に関する経費は遷宮式につき、祭典後日に臨時追加予算となすこと。

8月16日 第6回委員会 浄財収集の件打合せおよび本日までの決算を報告する。第1回および第2回の募金の合計は金1,009円である。本年4月6日より8月16日までの会計報告を承認する。今後工事に関し大小を問わず逐一松本市山口技師に相談して進めること。募金は理事者に9月10日までに報告すること。藪入りにつき懇親会を開催、一人分会費50銭とし、社務所にて開く。

8月23日 相談役会 山口技師臨席し御本殿修理箇所につき設計をおこなう。同日耕地総代より最年長者中楨金吾氏と相談役中より最年長者勝野嘉文治氏を工事監督として委任する。

9月8日 相談役会 大工仕事の中ほどまで進行したので、中棟上げをなすべく、また屋根屋職工は本日より仕事が始まるので手斧始として御神酒を献じたいと申し込む。この日が吉日で相談役会を開き、工事の見廻りをなし、御神酒を披露する。

9月23日 左右大臣塗り直し完了。本日受け取る。

9月25日 相談役会 工事に関する経過報告（大工並びに屋根残は9月16日に完了）。寄進木材に関する報告（手塚鶴一、山口好文、三澤義清、降旗晋作の4氏より）。花火師寄付の報告（打上げ3発 仕掛け花火）。上棟式遷座式に関する考究。

以上の案を相談し、かつ工事完了の場所を一覧する。慰安会を開き会費一人分30銭とする

9月27日 第7回委員会 寄付金、工事および会計の各報告あり。上棟式投げ餅にかかわる人名は大体定まったが、適当に空気の円満の⁽⁵⁾ことを□□事に一任する、予算は360円。正遷座祭の件。左右大臣の件 2円増しの30円。寄付採納の件報告（寄進木材、小島花火打上げ三仕掛け花火、有賀勝太郎氏より玉璽ツルギ参根石）。委員集合会は9回。相談役会は7回。山口好文氏への謝礼の件は理事者に一任する。神官に対する謝礼。職人に対する祝儀。上棟式の差異の写真撮影の件。以上が報告および協議される。

上棟式の他町村に対する通告は3日午後1時、委員集合時刻は午前8時、役割は理事者において作成、屋根餅の受付は各自の委員において査収すること、屋根餅は人員数に各一俵ずつ分配し残りは神前に御供として献じおく事、轆餅は工事に関する人名より投げる事、などが協議される。とくに披露宴会の賄予算は原案に基づき賛成を経る事につき一層経済に緊張をなし取計らい理事者において準備をなすことを一同より再認を受ける。

10月3日 まず、上棟式が営まれた。参列者は社掌・補助祭員3名、氏子総代4名、耕地総代3名、委員27名、来賓は高家村長、同書記、高家小学校長、高家駐在所巡查など、共親社代表（年長代表5名）、工事監督、大工棟梁および大工4名、杣師代表および職工5名、石工4名、瓦工1名、彫刻工2名、畳工2名、鉄工1名、製材所1名、塗工1名など。

つぎに正遷座祭が営まれ、参向員（高家村助役）、随員（高家村書記）、社掌、補助祭員4名、参列員（南安神社支会長、技師）、以下、氏子総代、耕地総代、委員、共親社年長、真々部青年会代表1名、真々部女子青年会代表4名など。閉式は10月4日午前2時であった。

それより社務所へ引き揚げ直ちに散会。宿直者が2名、社掌ほか神官は帰宅する。

10月11日 委員集会、掉尾の会合 集会の要綱は、4月5日より本日までの会計報告である。収入総額 金1,491円也 支出総額1,491円15銭 外に寄付額 3円也 差引2円85銭 過剰金

この報告を行い、一同に会計報告書と3月以降本日までの領収書をつけ、回覧させる。その結果、異議なく満場一致で承認された。そこで一同手打ちした。

出席者 手塚鶴一 亀井繁雄 丸山文一 手塚清十 手塚嘉金治 宮瀬安衛
藤原拓次郎 古川栄一郎 竹内仁瓶 勝野嘉文治 手塚雅人 手塚広 中楨金吾
手塚太一 竹内徳治郎 三澤新一 竹内喜長 竹内権市 竹内平三郎 二木幸八
降籙隆治 松尾末十

松尾今朝義 竹内茂 三澤鶴治郎代理 清友 丸山朔一 氏子総代4名 社掌
西川

欠席者 大谷茂美 有賀勝太郎 本山七十 丸山越 矢下紋雄

建築委員に記念品と謝状を付し贈呈する事 これは理事者と社掌に一任し贈ることとする。建築委員は 勝野嘉文治 中楨金吾 手塚節の3氏である。

社殿屋根古板は理事者において適当に見計らい処分することに一任

残材木は将来神社修理に用いるべき材木を選別し保存しておくこと。この時、公会堂の屋根普請を行うので適当な材料を選別して利用する事に決定する。

舞台蔵戸の修理にもこの板を用いて応急手当の修繕をなすことに決定する。

本日の会合にて式年遷座祭に委員一同の協力一致、敬神の努力をなしたので、始めから終わりまで無事平穩に遂行することができた。そこで全会一致慰労会を開催した。

4. 村社真々部諏訪神社の破損修理についての収入

この事業は主に耕地内外の寄付収入を財源とした。表11および表12は「昭和拾壹年 御本殿改修寄付帳 真々部諏訪神社」により作成した。同年4月には戸数割賦課戸数が229戸であった。寄付人数を寄付戸数とみなすと、それは耕地の総戸数の96.5%にあたる。そしてそれぞれが最小1円から最高15円の「浄財」を申請した。1円～3円50銭に131人、耕地の寄付人数の60%弱、10円～15円に14人、6%強である。これを即納あるは分割納するとした。耕地外から86人が応じており、1円～3円50銭に47人、総数の54.7%弱、10円～50円に15人、17.4%強である。耕地の総額862円52銭と耕地外の545円50銭、総額1,408円02銭が事業推進の基礎をなすことになる。

前述のように、耕地はこの事業遂行のために全体を第1区から第4区に区分した。第1区が上真々部・梓橋町、第2区が中村、第3区が殿村・田中、第4区が町通であ

る。各区の寄付人数、寄付額および1人平均がそれぞれの特徴を示している。とくに第1区はもっとも新しく承認された梓橋町を含む。それは信濃鉄道梓橋駅、梓橋銀行、高家郵便局などのほかに、諸小売業、小料理屋、銭湯、諸職人などから構成されていた。他方、第2区から第4区は、近世以来の歴史をもつ集落である（表11・表12）。

「昭和十一年九月吉日 他町村寄付連名 真々部諏訪神社」では、他町村（耕地外）の寄付人数は104人、四月の86人よりも18人増加し、寄付額は553円と四月の545円50銭よりも7円50銭増加して7円50銭増加した。さらに10月11日の最終の委員集合の会計報告では収入が1,491円、支出が1,491円15銭とあり、それに外に寄付金3円也で、差引過剰金2円85銭となる。なお、「上棟式引換寄付人名 十月三日」には耕地の第1区60人、第2区42人、第3区64人、第4区58人などあり、同年4月との差異を示している。第1区は1人減、第3区は3人増、第4区は1人増で、221人が224人と3人増加している。耕地外も86人から107人と21人増加し、総数は307人から331人へと24人増加したのである。

表11 寄付金額別人数 昭和11年4月

	耕地	耕地外	計
～1.52円	46	12	58
2～2.5	42	21	63
3～3.5	43	14	57
4～5.5	36	19	55
6～8	40	6	46
10～15	14	7	21
18		1	1
20		1	1
25		1	1
30		1	1
40		2	2
50		1	1
総額(円)	862.52	545.5	1408.02
人数	221	86	307
1人平均	3.90	8.34	4.59
最高	15	50	50
最小	1	1	1

表12 区別寄付人数、寄付額および1人平均

	寄付人数	寄付総額	1人平均
第1区	61	157.52	2.58
第2区	42	175.00	4.17
第3区	61	297.50	4.88
第4区	57	232.50	4.08
計	221	862.52	3.90

（出典）以上は『昭和拾壹年四月 御本殿改修寄付帳 真々部諏訪神社』による。

表13 耕地外金額別寄付人数
昭和11年9月

円	人数
1～1.5	19
2～2.5	26
3～3.5	17
4～5.5	22
6～8	7
10～15	7
18	1
20	1
25	1
30	1
40	1
50	1
総額（円）	553.00
寄付人数（人）	104
平均（円）	5.32
最高（円）	50
最小（円）	1

（出典）「昭和十一年九月吉日
他町村寄付連名真々部諏訪神社」
による。

表14 市町村別寄付人数、
寄付総額および1人平均

市町村	耕地	人数	総額	1人平均
豊科町	上鳥羽	22	68.5	3.11
	下鳥羽	7	17	2.43
	成相町	2	7	3.5
高家村	飯田	14	139.5	9.96
	小海渡	1	3	3
	熊倉	1	5	5
明盛村	七日市場	9	23	2.56
	一日市場	6	29	4.83
	及木	1	10	10
温村	中萱	3	17	5.67
	野沢	1	10	10
	長尾	1	3	3
倭村	榎村	1	7	7
	氷室	1	1	11
	杏	1	5	5
梓村	立田	1	1	1
	角影	1	3	3
	下堀	1	2.5	2.5
南安曇郡		74	352	
松本市		21	159	7.55
島内村	平瀬	1	5	5
本郷村	浅間	2	10	5
	三才山	1	5	5
入山辺村		1	3	3
塩尻町		1	7	7
宇都宮市		1	2	2
東京市		2	11	5.5
総計		104	553	5.32

ここで市町村別（耕地外）寄付人数、寄付総額および1人平均を見る（表13、14）。寄付人は南安曇郡の7か町村、18か耕地、松本市、東筑摩郡の4か町村、および宇都宮市、東京市に分布する。そして真々部耕地に隣接する上鳥羽、下鳥羽、飯田、七日市場、一日市場および中萱などに、それぞれ3人から22人みられる。上鳥羽と下鳥羽は真鳥羽堰、中萱は中萱堰をそれぞれ共用し、七日市場は上真々部とともに長尾道と梓川渡船場に関り、飯田は真々部耕地の最大の地主を含み、飯田堰を共用するなどである。一日市場は近隣の商業中心、松本市は中信地方の

商業中心である。寄付総額では取引関係の集中と有力な地主の転住をふくむ松本市の158円50銭、有力な地主や中小の地主をふくむ飯田の139円50銭、新類や耕地外分家からなる上鳥羽の68円50銭、一日市場の29円、七日市場の23円などがある。寄付人1人をのぞくそれぞれの1人平均では飯田の9円96銭、松本市の7円55銭、一日市場の4円83銭などが注意される。

寄付は金銭ではなかった。「昭和十一年十月三日 奉祝投餅帳 真々部諏訪神社」には、5人組ごとに5か組がそれぞれ1俵、41か組がそれぞれ2俵ずつ、結局214戸が87俵を奉納したのである。さらに「屋根餅五人組合せ名簿」には42か組200戸が声明を連ねている。

5. 村社真々部諏訪神社の破損修理についての支出

「昭和十一年 式年遷座社殿改修関係 真々部諏訪神社」にはまず工事関係諸費が記録される。煩をいとわず以下にこれを示すことにする。それは材木買入費から雑費領収書までの11か項目におよぶ。

材木買入費は54円27銭。松木立木一本、檜一本、材木交換差引、材木および懸魚材料などで、耕地外の2名、一日市場降幡製材所などと耕地の三澤美好などが取引相手である。

つぎに製材費合計の48円46銭。樺材檜材割は小倉の東田作十郎、各種製材は一日市場降幡製材所である。

第3に工事職工請渡費の478円39銭。社殿屋根葺替、御本殿改修増工事、石材直し、御本殿下コンクリート、御本殿石材代工費共、御紋章など、豊付け賃、社殿仮屋根製作費、日当2日分、薦33枚代などが合計411円65銭で工事職工請渡費の86%余を占めるが、耕地の三澤美好、三澤嘉清、大谷要、三澤新市、高山種雄、槇石石蔵、藤沢繁義、松澤良作、降簾精米所などに支払われる。銅磨板5枚代、左右大臣増金、左右大臣御像塗代、支那表極上弥生印、銅板10枚などが松本市の諸店舗、針金代が一日市場の竹内金物店などから購入した。

第4は消耗品合計30円65銭。松本市六九町の木下印刷店、島勇百貨店、信濃電気工業、鍋林商店などに支払われ、木炭5俵を耕地の勝野嘉文治から購入した。

第5は通信費の9円11銭。印刷代がおもなもので松本市六九町の郁文堂小林印刷

所へ支払う。

第6は人夫および運搬代47円59銭。これは11件あるが、すべて耕地の10名が受け取る。

第7は仮遷座祭費の64円50銭。まず、仮遷座ノ節銭湯入浴の礼で中楨金吾の銭湯、白米9升代の降簾精米所、伝馬1日半の宮瀬聰吾、するめ2把などの魚よし堤魚店、さけ、ゴトウするめ、砂糖、ビールなどの丸山商店などが耕地よりのもの、天竺2カマ代は松本市中西商店、白節絹、紅絹などの新潟県柏崎町ヤマイチ呉服店、手袋の縄手博品館、補助神官の一日奉仕、酒1斗5升の飯野屋などが耕地外のもの。

第8は御内陣費の75円34銭。御神宝用唐櫃および覆と御内陣調度品などの51円54銭は社掌西川壽美恵へ、白富士絹大幅4丈8尺は松本市ヤマコ中西屋商店より、耕地のものは机2個新調代7円が三澤嘉清へ支払い。

第9は共親社補助費100円。共親社年長代表の中楨清雄へ。

第10が上棟式正遷宮式費の337円78銭。5銭魚包300個など 魚よし堤魚店、落雁形代 丸山八九一、天狗棚請負金 共親社中楨清雄、天狗棚飾付請負金 三澤嘉清、糯白米一斗代金 降簾精米所、遷座祭使用蠟燭代と自動車賃松本往復4回分 年長代表中楨清雄、神官來賓賄費 丸山商店、上棟式に際し幣帛料 三澤美好、ヘイシン料 宮沢正一、菓子、茶、神官昼食代 中楨商店、御供料上棟式遷座祭 丸山商店などが耕地関係であり、90円35銭を受け取る。落雁7.5銭250人分

松本市熊谷駒吉、一個2.3銭盃450個代 松本市塚本陶器店、清酒8斗2升代 飯野屋酒店、電灯料 安曇電気、大奉書16枚 松本市島勇百貨店、真綿十匁代 松本市石井真綿所、本麻上 松本市酒井商店、矢竹3本 松本市中嶋屋竹店などが耕地外の諸機関で109円75銭を受け取る。各職工へ祝儀、中萱宮沢への飾付祝儀などが29円、社掌西川氏、山口監督への謝礼が40円、補助神官手当の10円がある。

最後が雑費領収書の241円05銭。これは中楨商店の17件、丸山商店の13件、魚よし堤魚店の2件などの耕地の各店舗がおもなものである。酒1升魚代（山口氏へ）、茶菓代（相談役会）、酒1升外の2件（山口社掌）、酒2升外（山口氏昼食、夕食）、酒1升外（豊受大神遷座費）、酒1升外（大神宮仮遷座費）、酒3本外（石工土台据付）、酒1升外（相談役集会）、酒4升外（委員集会）、酒1升外（松本市山口氏材木見立）、酒1升外（辰巳原の波風運搬）、酒3升（熊倉宮崎氏槍購求□□）、酒1升外

（枯損木見立□□）、菓子代（女子青年に依頼する□□）、酒2升外（賃貸価格調査のため）、酒3升外（山口監督と打合せ）などが中楨商店。酒2本外（辰巳原松の引き割の節）、魚代（委員集会）などが魚よし堤魚店。酒9升外（委員会）、酒3升外（山口氏と打合せ）、酒7升外（委員集会）、酒9升外（委員集会）、酒3升外（山口氏とともに木の見立）、酒3升外（熊倉宮崎氏の檜材見立）、酒9升（委員集会）、酒4升外（工事請渡しについて集会）、酒5升外（手斧始め）、酒9升（委員集会）、酒1升外（山口氏一日見廻り夕食）、酒6升外（中棟上に付き相談会）、酒7升外（委員会）などが丸山商店などである。

波風形こし紙・宮本紙3帖は一日市場の現金屋、酒1升（熊倉宮崎氏檜伐採の際）は飯田山久商店、酒3升外（相談会費）と酒肴代（社掌、山口氏昼食夕食）は豊科町立石の小口商店、酒肴代（熊倉宮崎氏よりの帰り）は山田屋など。さらに総代・共親社の松本行が6回、総代の各所用の11回などがある。以上をまとめたのが表15である。

表15 昭和11年 式年遷座社殿改修関係諸費用

金額 (円)	費 目	耕地		耕地外	
		件	金額 (円)	件	金額 (円)
54.27	材木買入費	1	4.00	4	50.27
48.46	製材費			7	48.86
478.39	工事職工請渡費	10	335.45	8	142.94
30.65	消耗品費	1	10.75	13	19.90
9.11	通信費	1	4.41	3	4.70
47.59	人夫及運搬費	11	47.59		
64.50	仮遷座祭費	5	26.49	5	98.01
75.34	御内陣費	1	7.00	3	68.34
100.00	共親社補助費	1	100.00		
337.78	上棟式正遷宮式費	17	159.35	7	178.43
241.05	雑費領収書	34	231.38	5	9.67
1487.14	計	82	926.42	55	620.72

（出典）『昭和十一年 式年遷座社殿改修関係 真々部 諏訪神社』による。

表15の件はそれぞれが情報を収集し発信する機関数、すなわち社会的交流結節機関数である。材木買入には耕地の1機関、耕地外の4機関がかかわり、費用のほ

とんどが耕地外へ、製材はすべてが耕地外である。他方、工事職工請渡、人夫および運搬、共親社、上棟式正遷宮式、雑費領収などがおもに耕地内の諸機関によってなされ、材料買入、製材、消耗品、通信、仮遷座祭、御内陣などが耕地外の諸機関によってなされたことになる。そして上棟式正遷宮式はほぼ耕地内と耕地外の諸機関が折半してなされたことになる。

耕地内の諸機関で注意されるのはまず、耕地の町通りは大工・建具・屋根・石工その他の多様な職人層から構成され、それが工事職工請渡しを担い、梓橋町は人夫および運搬の要員を担ったのであろう。なお、耕地外の諸機関の多くは松本市にあり、若干が温村の一日市場、その他にあった。

まとめ

社殿改修式年遷座祭は狛犬奉献よりも大きな事業であったことは前述のとおりである。そこで、前者を中心にまとめてみたい。

まず、この事業の費用は耕地内外の寄付収入の1,487円14銭である。これは同年の歳入決算の区費1,511円10銭や神社費1,516円39銭に近似する額である。しかも、それは区費や神社費にかかわらない別枠のものであった。つぎに、この事業に奉仕するのは、号組なる制度的近隣組であり、それらは既存の互助組織である庚申仲間や木戸と深く関連していた。第3に共親社のほかにあらたに青年会および女子青年団が参加していた。この面で準戦時体制下の組織活動であった。

第4にこの事業は極めて重要なであり、氏子総代、耕地総代のほかに28名の委員が加わる全耕地的委員会が組織され、相談役を選出して、それを中心に多くの会議がおこなわれ、相当な協議をへて営まれた。会合において相当量の酒が消費された。

第5に、耕地内の店舗との取引による「雑費領収書」を除くと、この事業の相当な部分は耕地外の諸機関に支えられた。とくに松本市所在のそれらによった。しかし、工事職工請渡しの多くは耕地によってなされており、そこに耕地の特徴の一つがみられた。

あとがき

この稿は「真々部区有文書」の閲覧を許された真々部区、とくに区長であられた丸山忠志、吉原貞夫、田村浩の三氏のご配慮に負うところがきわめて大きい。さらに、「真々部歴史同好会」の会長の本山正、手塚真の両氏および諸兄姉より貴重なご助言をいただいた。さらに来住年月の浅い小生の「ハネオヤ」を務めておられる白井国明ご夫妻の強力な援護ははかりしれないものがありました。末筆ながら芳名を心から感謝したい。

注

- (1) 制度的「隣組」と耕地内の庚申仲間、木戸、同姓などとの関連は極めて興味深いものがある。
- (2) 耕地には「共進社」という「若者組」があり、ながく真々部諏訪神社の祭儀を中心にその他の諸事に参加していた。ここに「青年会」が登場する。前者は耕地内の諸事の参加するのに対し、後者は高家村、郡および県レベルの諸事に参加するようにみえる。さらに女子青年団は同様の活動をしたのであるが、これは耕地内の諸活動にも参加するようである。それが昭和戦前期から関係文書より観察される。
- (3) ここに高家村内での諸耕地の特徴がみられる。
- (4) 真々部区誌編纂委員会（2010）『真々部区誌』249頁。
- (5) 以下、引用史料中の判読不明箇所は□と表記する。

参考文献

- 長野県（1989）『長野県史 通史編 第八巻 近代 二』
- 長野県（1989）『長野県史 近代史料編 別巻 統計（一）』
- 豊科町誌編纂委員会（1997）『豊科町誌 近現代編』
- 真々部区誌編纂委員会（2010）『真々部区誌』
- 黒崎八洲次良（2018）「区有文書」からみた第一次大戦前後の耕地の生活（財政）について—長野県安曇野市真々部区を中心に—『論集』154、59-89。
- 黒崎八洲次良（2018）「区有文書」からみた昭和初期の耕地の生活（財政）について—長野県

安曇野市真々部区を中心に」『論集』155、23-61。